

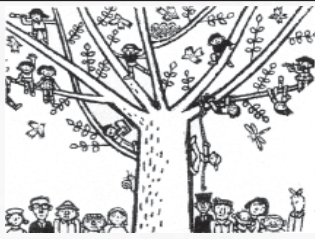
九条の樹

東久留米「九条の会」ニュース 第41号

2012年10月発行・東久留米「九条の会」

代表者 古田足日・連絡先 鈴木Tel. 042-473-9489

<http://members3.jcom.home.ne.jp/higashikurume9/>



日本国憲法9条を守り、活かす 東久留米「九条の会」

憲法をめぐる 最近の危険な 動き

東京慈恵医大教授、九条の会事務局長の小沢隆一さん

9月9日、

西部九条の会

主催で、図書

館視聴覚ホー

ルにて、東京

慈恵医大の憲

法学教授、九条の会事務局員でもあ

る小沢隆一さんを招き、学習会を開

催しました。



講演の前には新婦人朗読小組により、原発に対して警告を発し続けてきた南相馬市に住む詩人、若松丈太郎さんの詩「神隠しされた街」の朗読がありました。当日参加者は61名で、若い人の参加もあり関心の高さが伺われました。

●民主党政権下での改憲の動き

民主党政権の安保・防衛政策は、

日米安保を絶対視する対米屈従と軍事生産の拡大に固執する大企業いなりという特徴をもっており、この特徴は自民政権のそれと変わらないうどころか、自民政権のもとで生まれ今日まで受け継がれてきた「基盤的防衛力」構想や「武器輸出三原則」などの見直し、すなわち放棄を「政権交代」という機会をとらえて果たそうとしているようにも見える。過去の経緯を「しがらみ」として引きずらざるをえない自民政権よりも、かえって危険な側面があるともいえます。

●憲法審査会の動き

憲法審査会は、昨年10月からスタートし、今

年5月の時点

で衆議院、参議院

それぞれ通

算10回開催

されています。

その中で

東日本大震

災を口実に

した「非常事態」規定導入の改憲論が出ています。9条を改憲すれば当然に非常事態権限が必要になるだろうと、そのための布石として非常事態権限を入れておこうという狙いです。国会を飛ばして政府に非常事態権限を与えたからといって津波は止まらない、地震も防げない。復旧復興であるならば、新しい法律つくってやることになるので、憲法で政府に白紙委任の権限を与える必要はありません。

●学習会のレジュメから

「誰かの犠牲の上によって立つ幸せなどはない」という平和的生存権の理念に照らしたとき、日本の原発政策や安全保障政策は、根本的な見直し、変更が求められます。

政・財・官・学が一体となった「原発利益共同体」の支配、不安定な就労条件の労働者に原発の現場労働という人体に重大な影響を及ぼす

(2ページへ)



新婦人朗読小組



戦争、人間、そして憲法九条②

危険な業務を押しつけている実態、日本に駐留する米軍とりわけ「世界で一番危険な基地」とも呼ばれる沖縄の普天間基地に駐留する米海兵隊を「抑止力」だとして、名護市辺野古地区への移設を、地元の名護市の反対にもかかわらず普天間基地閉鎖の条件としている日米両政府。いずれも、「誰かの犠牲の上によって立つ幸せなどはありません」という理念に真っ向から反するものといえます。こうした現実の政治や社会にひそむ問題を、憲法の視点から点検し、それを国会や政府に改めさせ、問題を克服していく努力が、私たち国民に求められています。

以上のような内容でした。



九条の樹39号戦争、人間、そして憲法九条①の続きです。東久留米九条の会5周年の集いで品川正治さんの記念講演の後半部分です。品川さんは経済同友会終身幹事という財界人の仕事をしながら、ご自身の戦争体験を踏まえ憲法九条を守ることを訴えています。

中国の戦場と私のトラウマ

本隊と連絡するのに三日間かかるという飛び離れた河南省の西端に近いところが私が派遣されていった場所です。この場所は戦後調べましたところ、まったく日本軍とは飛び地のようなところで、あの中国共産党の八路軍の本拠、延安に最も近いところにおった部隊であります。そこへ行くまでも大変でございました。いわゆる中国共産党軍、また中国国民党軍と戦闘を交えながらしか行きよ

うのない場所でありました。そういう所でございますから明けても暮れても戦争状態が続きました。私は陸軍二等兵、擲弾筒の投手の役割を与えられていたわけです。体に十二発の手りゅう弾を巻きつけて擲弾筒という兵器を敵地に撃ち込むというのが私の仕事でした。ときには擲弾筒が間に合わない白兵戦を戦ったこともございます。何度も攻撃を受け何度もそれを退け陣地を固守するというのが我々の仕事でしたが、あるとき迫撃砲の直撃を食らいついて、擲弾筒はもちろんのこと私の体も地面から吹っ飛びます。そのとき受けた四発の破片が体に残りまして、一つはどうしても取れないという場所で右ひざの奥でございしますが、今でも残っているわけです。

ただ私はこんな話は八十近くになるまでしたことはございませぬ。先ほどご紹介いただいたように私は日本火災という損保の社長、会長もやった男でございしますが、会社の人間に私の足にまだ迫撃砲の破片が残ってるなんてことを言ったことは一度もないです。そういう意味ではごく最近こういう話を、もう我々の周りの人たちは亡くなって本当の戦闘体験をお話する機会はもうないんじゃないか、そういう気持ちに駆られてお話ししているわけなんです。

戦闘体験は語りづらい物です。「なぜ生き残ったんですか」「どうして生き残れたんですか」という一言で、その方の戦争中のあらゆるトラウマが出て来るわけなんです。私にもはつきりとしたトラウマがございました。

ある戦闘で、わたしの壕から、壕というのはタコ壺と我々言っておりますが地面を掘った穴でございします。十数メートルしか離れていない壕にいた私の戦友が激しい戦闘のなかで「やら

れた。助けてくれ」その後は「品川、品川、品川・・・」と私の名前を連呼して・・・私は本能的に私の壕から飛び出そうとしました。しかしもうひとり私の壕には戦友がいました。私が飛び出すのを馬乗りになつてた首を左右に振つてるだけなんです。「今は出るな。出ればお前が死ぬんだ」ということを一言も言わないわけですけれども、とにかく私を馬乗りになつて、その最後に私の名前を連呼されて、戦場の話といわれるとまずそれを思い出します。

ところが私が復員して東京で下宿して大学に通つておりますときにまったく不意にその亡くなった戦友の母親が島根県の山奥から出てこられました。東京も焼け野ケ原でしたから、よく私の下宿先が見つかったなと思いますが、そのお母さんが「私の村で息子さんの最後を知っておられるのは品川さんだけだ。また軍隊で一番親しかつたはず

だ」そういう話から村の役場を中心に必死になつて私の住所を探され、あの当時は鉄道の切符さえを手に入れるのも大変だったのですがそれも「全部村の人たちがお金を出して往復の切符を買つてくれて今日参りました」と言われたとき、「私の息子の最後をお話ください」と言われたときには私は面を上げることもできませんでした。そういうトラウマがあつたために、私は家族のものにさえ一切の戦闘体験というのは話したことがございません。

ただ、こういう形でみなさま方とお話しているなかで島根県でかなり大きな九条の会の会合がございました。つきましてはたんに主催者の方から、「一度もお目にかかったことのない山奥の村からバスを三台連ねて今日は来られた。自分達の会合には一度もそんな離れた村から来られたことがない。品川さん何か思い当たることございませんか

か」と言われたんです。何度も私が講師だなど確認されてきた。きつとご存知の方だと思う。私はその（なくなった戦友の）村に決まつておると思いました。

こうやつて演壇の上に立ちましたとき、その人たちの一角はざわめき立ちました。私はその人たちのほうに向かひまして手をついて謝りました。「何もあなたのそういうことを聞きに来たんじゃない。あんたの顔を見に来たん」そういつてその人たちは声をあげて泣き出したんです。主催者の人はメモを入れられて「しばらく休憩しますか」と。みなが泣き出すとほかの一般の人にも伝わって涙の渦になりました。私は主催者のそのメモに対しても「いやこのまま続けさせていたきたい」とお答えして、その後、いつものような話をしたんですが、それが私の六十数年間トラウマとして持っていたのが、そのときに機会に消えていったような感じ

を受けまして、そのあとは今日お話したような自分の戦闘体験を率直にお話しするようになりました。

これも一つ私事にわたつて恐縮なんです、私は一人息子の夫婦を亡くしまして、孫娘を小学校のときから私の娘として育ててまいりました。娘は時々東京で私がこういう講演をやりますと、どこで聞いてくるのか黙つて最初は柱の影でひとり聞いておりました。先ほど私がトラウマが取れ、それで降自分の戦闘体験を話するようになつてから、最初に東京で話したときそれを娘が聞きまして帰るなり「おじいちゃんはずえ足に弾が入つたまままだということを言つてくれなかつたのか。毎晩でももんであげたのに。今でも痛むんじゃないの」そう娘が言つてくれたんです。

（このあと、戦後憲法が施行され九条が出来た時の話もありましたが紙面の都合で割愛させていただきます。）

反原発意思表示

ウォーキング!

9月8日(土)午後4時半、第1回ウォーキング開始。のんびり世間話をしながら。ピピ通りに出たら「おもち専門店」のお兄さんと遭遇。「頑張って」の声を背に、ひびりヶ丘団地タンプポ公園へ。小休止のあと引き返し、午後5時半、いこいの広場着。一時間のウォーキングも無事終わりました。

第2回は10月6日(土)

午後4時スタート。

集合場所は学園樹林地



問い合わせ先

浜名純: jhamana@jcom.home.ne.jp

森山恒逸: tsunemoriyama@ybb.ne.jp

「核の傷」 上映のお知らせ

12月9日(日)

午後2時

(開場1時半、終了3時半)

場所: 東久留米市立生涯学習センター(まろにえホール)

前売り券: 500円

(当日券 600円)

主催: 東久留米「九条の会」

問い合わせ先

473-9489 (鈴木)

478-3266 (大山)

核の傷

肥田舜太郎医師と
内部被曝

被爆者治療と核廃絶運動に
献身した肥田医師が内部被曝
の実態を訴える。

私に課せられた
使命として、
自分の体験を
死ぬまで語り
続けていきたい

併映作品: 「811以降を生きる: 肥田舜太郎医師講演より」(アップリンク製作)

於: 東久留米市立生涯学習センター・ホール

入場料: 前売 500円・当日 600円 (チケット取扱いは裏面をごらんください)

主催: 東久留米「九条の会」 お問い合わせ: 042-473-9489 (鈴木)・042-478-3266 (大山)

ホームページ: <http://members3.jcom.home.ne.jp/higashikurume/>

被爆医師・肥田舜太郎さんの証言・・・肥田さんが28歳の若き軍医だった時、広島で原爆に遭遇し、直後から被爆者救済・治療。1953年、全日本民主医療機関連合会創立に参加し、以来66年間、共同病院院長、被爆者団体中央相談所理事長など歴任しながら、欧米など30ヶ国で被爆の実相を語り核廃絶と内部被曝の脅威を訴えてきました。

《平和を考える本》
「消えた町 記憶をたどり」
絵と証言 森富茂雄

消えた町 記憶をたどり
松と証言 森富茂雄

本書は、原爆投下される前後の
広島を、鉛筆描きで立体的に
表した絵地図。描いた森富氏は、
昭和二十年八月六日、十六歳で被
爆した。絵地図を始めたのは六十
歳を過ぎてからで、誰に見せる当
てもなく、描いておけば誰かが見
るだろうと思っただけだといふ。

少年時代の幸せな記憶をもとに
描かれた地図は、建物と川だけの
克明で静逸な絵。人物はほとんど
登場しない。それだけに、建物と
共に吹き飛ばされ、焼かれ、死ん
でいった人々が十五万近く(昭和
二十年十二月末までに)もいたこ
とが、そくそくと胸に迫ってくる。

(高田)